

らららん3号



2019. 5. 9

最近の交通事故に思う

最近、痛ましい交通事故がよく起こっています。4月後半から連続して新聞の紙面を痛ましい事故が掲載されました。主な事故は、次のようなものでした。

- ① 4/19(金) 午後0時25分発生 東京・池袋の暴走乗用車 母子2人死亡
容疑者87歳 ガードパイプに接触し動転、一連の事故を起こす
- ② 4/20(土) 午後2時ごろ発生 神戸市三ノ宮駅前市営バス暴走 2人死亡
64歳のバス運転手、停留所から出てブレーキをかけずアクセルを踏む
- ③ 4/22(月) 午後2時35分発生 熊本市中央区 トラックとミニバイク、
こども園の送迎バスなど計5台が絡む多重事故 2人死亡
- ④ 4/23(火) 午前7時15分発生 千葉県木更津市 横断歩道を歩行中の小3女子
1名死亡 軽乗用車の49歳の容疑者「ボーッとされていて、信号を見ていなかった。ブレーキをかけたが間に合わなかった」しかし、横断歩道手前にブレーキ痕なし。

事故の概要を見ていくと、運転者が明らかに集中して運転できていない状況がみられます。①では接触事故に驚き、次の行動が冷静に判断ができなかったようです。②と④は、運転者が集中して運転していたとは言えない状況です。不幸にしてこの事故に巻き込まれた皆さんはとても悔しかったと思います。歩行者の側から考えると「信号は青だから渡る」は当然のことですが、それだけでは十分といえない状況が多いことに気づきます。自分で「大丈夫か？」ときちんと確認することが大切でしょう。運転者が朦朧としていれば、赤信号でもブレーキを踏まずに走行してくる危険性があるのです。残念ですが、このような事故は、運転者の高齢化や精神的な不安定さなどから増加傾向にあると思うのです。免許の返納を促すことも大切ですが、生活の足として使われている車の場合は、簡単にやめることも難しいでしょう。

では、被害者になる可能性の高い子どもたちはどうしたらいいのでしょうか。事故を未然に防ぐためには、自分の目で安全確認をすることが危険性を減らすための手立てのように思うのです。園では次のことを教えています。

- ① 車道の左右から車がきていないか、自分の目で確かめること。
- ② 車が近づいて来たとき、停止したことを確かめ横断すること。また、停止しないときは、車が通り過ぎるのを待って横断すること。

園児は幼児部とアンパンマン広場の間を移動するとき、一人一人が車が来ないかよく見ることができるようになりました。今後も、きちんと確認することを継続させることが大切だと思っています。しかし、慣れてくるとだんだん形式的になってしまうことも考えら

れます。ご家庭でも子どもたちが事故を未然に防ぐように心掛けているか、声掛けをお願いします。

制帽をかぶろう

朝、通用門に立っていると最近帽子をかぶっていない子がいるのに気づきます。髪を編んだりすると帽子のおさまりが悪いのかもしれませんが、しかし、これからの季節、だんだん暑くなると熱中症も心配されますので、帽子をかぶることを心掛けるようにお願いします。ご家庭での声掛けもよろしくお願いします。

ご協力ありがとうございます

1学期がスタートして、ほぼ1ヶ月が過ぎました。車で送迎される皆さんは、園の駐車場が台数が限られるため、ご迷惑をお掛けしています。しかし、日数を重ねるごとに皆さんのご協力、車の出し入れがスムーズになってきました。誰もが忙しい時間帯になりますので、できるだけ駐車時間を短くし、出し入れを効率的にさせていただくと助かります。また、だんだん慣れてきて安全確認が不十分になると、接触事故も考えられます。車を駐めるときは、前後左右の安全確認を十分にさせていただきたいと思えます。引き続き、皆さんのご協力をよろしくお願いします。

そして、バトンは渡された

今年の本屋大賞は瀬尾まいこさんの「そして、バトンは渡された」です。史上空前のゴールデンウィークも孫の相手くらいで（それなりに楽しかったのですが）大きな出来事はありませんでした。しかし、GWに「そして、バトン……」を読んだことは私なりの満足感がありました。印象的なところを挙げると……

※八歳の優子(物語の主人公)に向かって、継母の梨花さんが話したことの要約。

「女の子は笑ってればかわいく見えるし、どんな相手にでも好かれるよ。人に好かれることは大事なことだよ」と言いました。

それを聞いた優子は、できるだけ笑ってようと、心に決めました。普段はうるさいことを言わない梨花さんのアドバイスだから、聞いておいたほうがいいと感じたのです。笑っていないとだめなことが、いつかやってくると予感したのです。

※高三の優子が継父の森宮さんとの夕食の場面で思ったことの要約。

森宮さんが作ったカレーを、私は口いっぱいほおばりました。カレーは辛いのに、玉ねぎもにんじんも甘くておいしいのです。塞いでいるときも元気なときも、ごはんを作ってくれる人がいることはありがたいと思えました。それは、どんな献立よりも力を与えてくれることかもしれないとしみじみ感じたのです。

人の優しさをしみじみと感じる小説でした。物語というより作者のエッセイのようにも感じました。私も自分の家族を大切にしたいと思えました。「笑顔」の大切さがわかります。団欒を優子のように感じてくれたらいいなと思えました。心の中が温くなる本でした。皆さんどうぞ読んでみてください。

